

地方における初期テレビ受容 —青森県下北郡佐井村（1957-1959）を事例に— The Reception of Early Television in Rural Japan: The Case of Sai Village, Aomori (1957-1959)

太田美奈子¹
Minako OTA

¹早稲田大学大学院文学研究科 表象・メディア論コース博士課程
Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

要旨・・・NHK函館テレビ局の開局により青森県の多くの地域でテレビが視聴可能となった1957年からの2年間、県内で最もテレビ普及率の高い市町村は佐井村という漁村だった。「子どもたちに外の世界を見せたい」という教育的な動機から、村ぐるみでテレビの普及を推進し、積極的にテレビを受容しようとする村人たちの姿があった。子どもたちはテレビに触発され、教育的効果を超え出るような豊かさや遊戯性を獲得していった。

キーワード 初期テレビ受容、民俗誌、地方、青森県、子ども

1. はじめに

(1) 研究背景

本研究は地方における初期テレビ受容の一例として、青森県下北郡佐井村のテレビ受容を明らかにするものである。これまで、初期テレビ受容をめぐる議論は大都市を中心に語られてきた。街頭テレビの設置により人々が初めてテレビを体験し、力道山のプロレスに象徴されるような集団視聴でテレビ熱が加速、1959年の皇太子御成婚パレードを契機にテレビを購入する家が爆発的に増え、1964年に開催された東京オリンピックの頃にはテレビが日常生活に溶け込んでいる、という流れが従来の定説である。

一方、これまで地方における初期テレビ受容には光が当てられてこなかった。飯田豊（2016）は「テレビは戦後、全国各地の地域社会の日常のなかに、いったいどのように溶け込んでいったのだろうか。実のところ、首都圏ではなく地方での普及のあり方は、決して体系的にはまともではない」とし、前述した定説が都市に限定されている可能性を指摘している。

地方の初期テレビ受容を、都市のそれと似たような姿として想像することは難しい。例えば街頭テレビによってテレビ熱が構築されたという定説である。街頭テレビは1953年から日本テレビによって合計278ヶ所に設置され、東京放送や中部日本放送、毎日放送もこれに続いたが、設置場所は基本的に関東と関西に集中していた。他の地域では、街頭テレビの熱狂的な体験を持たないまま、どのようにテレビ熱が生み出されていったのだろうか。また、電波塔の設置状況や、現代よりあらゆる面で都市と地方の乖離が大きかった時代性を踏まえると、テレビの購入から視聴、その後の地域の変化まで、都市と同じ受容の姿があったとは考えにくい。地方における初期テレビ受容を掘り起こす作業は、東京中心のテレビ受容史を相対化し、さらには初期テレビが様々な可能性に開かれていたことを考える契機となり得るはずである。

筆者の故郷である青森県に初めてテレビ局が設置されたのは、東京でテレビ放送が開始された6年後の1959年であった。しかしその2年前にはNHK函館テレビ局が開局し、青森県の多くの地域でテレビが視聴可能となる。函館からの電波によって青森県民がテレビを視聴していたこの2年間、県内で最もテレビが普及した市町村は佐井村という漁村だった。当時は村内9つすべての小中学校にテレビを備え付け、テレビ教育に関して様々な賞を受けるなどしていた。テレビ普及率の高さから「テレビ村」と称されていたという。

下北半島の北西部に位置する佐井村は、函館との距離が近いこと電波のキャッチが比較的容易い。しかし普及率の数値は、同じく函館に近い近隣の町村と一線を画している。なぜ佐井村の人々はそれほどテレビを欲しがったのだろうか。そして、テレビは佐井村の人々にいかなる影響を与えたのか。佐井村におけるテレビ受容体験を文献資料と聞き取り調査から丁寧にたど

ることで、当時の地方の人々にとってテレビがどのような意味を持っていたのか考察する。

(2) 研究方法

当時の様子を知り得る文献資料を収集した。1957年から1959年の間に発行された地元紙や全国紙、『青森県教育広報』や『放送文化』などの雑誌から、佐井村のテレビ受容に関する基本的な情報を得た。さらに、佐井村の小中学校や村役場が所有する予算・決算の執行報告や村議会議事録から、当時の状況を裏付けていった。また昨年秋には佐井村を訪問し、聞き取り調査を実施した。インタビュー回答者は16名で、当時のテレビの普及に関して重要な役割を担った人物たちのご子息や、現在の教育関係者、当時のテレビ受容を体験した人々などである。文献資料と聞き取り調査による彼らの語りを一次資料とし、佐井村における初期テレビ受容の姿を民俗誌的に編み直していった。

(3) 佐井村概要

佐井村は下北半島の西に位置する漁村である。江戸時代から明治時代にかけては、北前船によるヒバの積み出し港として栄えた。船は一度の航海で一万両とも言われていたと村人たちは語っている。ヒバが国有林になった後、村の人々は漁業に転向した。1957年当時の生活は貧しく、出稼ぎと失業保険でどうにかやりくりをする人が多かったという。渡辺村長は「神武以来の景気と世はゆうものの佐井村は惜しくもその余波に浴さぬのみか反対の現象すら残念乍らあらわれております¹」と述べている。高度経済成長に沸いた時代だが、佐井村の経済状況は厳しかった。

佐井村は南北に細長い形をしている。東側には600mから800m級の恐山山地がそびえており、山を越えることは困難であった。陸より海のほうが移動が容易いため、海を隔てた函館を近しく感じ、県内の主要都市よりも行き来があったという。現在も佐井村までの交通は不便であり、村内すべての学校が「へき地指定校」となっている。

地理的な困難さの影響は子どもたちに如実に出た。1951年に佐井村で初めての修学旅行が実施され、小学校5,6年生が函館へ行った。部落の漁船2隻に分乗し、デパート、放送局、教会、消防署、造船所、停車場、市場等を見学し、午後4時過ぎに帰宅するというものだったが、子どもたちは函館の街の風景に驚愕したという。「見るもの聞くもの皆初めてのものばかりで、生徒はただ唖然として、函館の人から何を聞かれても返事が出来なく、啞の学校と笑われたという話もあった²」という記録が残っている。また、就職のため他の市町村へ赴いた青年たちは「佐井の山猿」と呼ばれた。就職先の地域の常識がわからず、ことばも不自由したため、新しい環境に順応することが難しかった。

当時の佐井村のテレビ普及率は1957年度末に4.6%、1958年度末に6.2%となっている。県平均は1957年度末に0.4%、1958年度末に0.7%であり、県内第1位の人口を抱える青森市でも1957年度末に1.2%、1958年度末に2%と佐井村には及ばない。下北郡全域の普及率も1957年度末に0.8%、1958年度末に1.4%となっており、佐井村の特異性がうかがえる。1959年度末になると、佐井村の普及率は青森市など県内5つの市町村に追い抜かれ、1960年度末には県平均の19.6%にも及ばず12.8%に留まる⁴。1959年はNHK青森テレビ局の開局と皇太子御成婚パレードがあり、県内のテレビ普及が急激に進んだ年だった。1959年以前においてのみ、佐井村は県内でも突出したテレビ村であったことがわかる。



2. 佐井村の小中学校におけるテレビ設置

(1) テレビ設置の経緯

この発端は1956年に遡る。佐井村で当時教育長を務めていた奥本静一氏のご子息によると、奥本教育長は以前から親交のあったラジオ商三戸長蔵氏に「テレビを受信できないか?」と話を持ちかけたという。1956年はNHK函館テレビ局の開局前だったが、開局の1年前から試験電波が流れていた。三戸氏は青森市から中古品を買入れ、約1ヶ月で電波の受信に成功する。

佐井村におけるテレビ教育取材した『放送文化』1958年9月号には、学校におけるテレビ導入の顛末を追った記事が掲載されている。奥本教育長と三戸氏がテレビの電波受信に熱中していた頃、隣接する田名部町で下北郡の教育長会議があった。奥本教育長が「視聴覚といえどこの学校もナトコとスライドしか考えていないようだが、来年春にはテレビも受像出来るとい

¹『昭和32年 佐井村議会議定例会会議録』第1回佐井村議会議定例会会議録より。

²佐井村編『佐井村誌上巻』佐井村、1971年、p.351。磯谷小・中学校沿革の記述。

³秋月桂太「さい果てのテレビ村」『放送文化』1958年9月号、p.27。

⁴テレビ普及率の数値は日本放送協会編『受信契約数統計要覧』日本放送出版協会、1958年～1961年より。

う。ここで視聴覚教育を一步前進させる計画はないのか？」と発言すると、笑い出す他町村の教育長もいたという。しかし指導主事が奥本教育長の側に寄り「さっきの発言は時宜を得たものだった、ひとつ御村で手をつけて貰えないか？」と励ましたことで、奥本教育長はテレビによる視聴覚教育を現実的に考え始める。テレビはナトコやスライドといった視聴覚教材の延長線上に捉えられていたことがわかる。

1957年3月にNHK函館テレビ局が開局し、5月になると奥本教育長の発議で臨時村会が開かれた。教材用として村内9つすべての小中学校にテレビを備えるという案に対して、100万円という金額の大きさや、テレビが本当に勉強の役に立つのかといった点から批判がなされた。しかし「まんず、おらアだちのわらし共だば、首ッこしばられた山羊ッこみてえなもんだス、世の中のこと何でも知らぬすけ、よそさ行って働くこと出来ね、まんずそれ位の銭コですむならテレビ買ってやるだな」との発言が出て話はまとまり、分校を除く7校にテレビを備えるという形で予算は可決された。6月の村議会では分校も含むべきとの議論がなされ、村内すべての小中学校にテレビを購入することが決定、9月には全小中学校で視聴覚教育が始まった。

(2) テレビ導入の目的

当時の渡辺村長は「よそへ出してやつても、劣等感をもたないようなこどもをつくりたい⁵⁾」との思いからテレビの導入を進めたという。教育委員会は当時を振り返り「特に佐井村教育行政の重点施策として意を用いたことは、(中略)観念上からも、実質面からも、僻地性を払拭し脱却するために、先ず僻地教育の充実発展を期することにあつた⁶⁾」と記している。テレビの導入はこの重点施策の実施例だったという。僻地性を乗り越えるための道具としてテレビは求められた。

3. 佐井村のテレビ教育の実際

テレビ教育はテストの点数に現れるような具体的な効果を狙ったものではなく、村以外の世界を知ることで将来的に何か役に立てば良いという穏やかなものだった。1959年1月号の『青森県教育広報』には、佐井村における当時のテレビ教育の様子が報告されている。大らかな意図で始まったテレビの視聴だが、渡辺村長はその手応えについて「結果は非常によい。どこがどうという目ぼしいことはないのですが、修学旅行から帰ってきた子どもたちの話をきいてみても、テレビで視野が広がっているせいか、いろいろなことを科学的に細かく観察してきているようです」と述べている。テレビを視聴する以前の子どもたちは、函館の街の規模にただ驚くばかりで、コンクリートの道路や電車、大きな建物の話しかしなかったが、テレビ以後の子どもたちは、街を見る視点を多様に持ち、村長を捕まえては熱心に話していたようである。「啞の学校」と呼ばれた初めての修学旅行とは見違えた姿である。「とに角、劣等感がなくなつたのが何よりです」と村長は話している。

教師たちもテレビ教育に手応えを感じていた。どの学校でも図書館の利用が増加し、朝や昼休みの時には子どもたちが足の踏み場もないほど詰めかけるようになった。テレビによって想像力が豊かになり、寓話や小説のフィクションに抵抗を感じなくなったという。原田小学校では父兄47名に対するアンケート調査を行っている。「おちつきがで、物ごとを考えるようになった」は28名、「いろいろ家人と話し合いをし、話をする内容が豊かになつた」は37名であり、総合的に38名(約81%)の父兄は「全体的にみてテレビは子どものためになつている」と回答している。「外の世界を見せたい」という大らかな意図で始まったテレビ教育は、結果として視野の広がりや自発性、明るさなど、教師たちの想定を超え出る豊かな効果をもたらした。

4. 教育をはみ出す子どもたちのテレビ受容

学校では授業時間のほかに、放課後や夜、地域に向けてテレビを開放した。テレビの集団視聴は学校に留まらず、テレビを持つ家庭の居間にも及んでいく。奥本教育長は村費で購入したテレビを自宅に導入し、「テレビ子ども会」を行った。公民館がわりに開放した8畳の居間と廊下には、毎日20人以上の子どもたちが見に来ていたと村の人々は語っていた。

テレビの視聴によって子どもたちには様々な変化が見られた。まずは遊び方の変化である。例えば野球では野手の動き方が本格的になり、相撲の取り口も驚くほどであったそう⁷⁾。これまでラジオで聞いていたスポーツの動きをテレビで体得したようである。また、流行に敏感になった。佐井村では東京と同時にフラフープが流行した。青森市でフラフープが流行する頃には、佐井村でのブームは終わっていたという⁸⁾。さらに、空想的な世界を広げていった。子どもたちはアニメに刺激されてマン

⁵⁾青森県教育委員会編「さいよの地に咲く テレビ教育」『青森県教育広報』1959年1月号、p3.

⁶⁾佐井村編『佐井村誌上巻』1971年、p285.

⁷⁾秋月桂太「さいよの地のテレビ村」『放送文化』1958年9月号、p29.

⁸⁾青森県教育委員会編「さいよの地に咲く テレビ教育」『青森県教育広報』1959年1月号、p7.

トのようなものを持ち出し、高所から飛んだり跳ねたりしていたという。挙げ句の果てには捻挫することもあった⁹。子どもたちはテレビに触発されて世界を拡大し、教育的な効果をはみ出すような遊戯性や想像力を獲得していった。

5. おわりに

佐井村は彼らのテレビ草創期において、テレビを視聴覚教材の延長として捉え、村ぐるみで教育的に受容しようとした。その結果、教育を超え出るような子どもたちの変化があった。「教育」という娯楽以外の可能性をテレビに見出したことや、テレビの娯楽性をも肯定することで子どもたちが開かれていった姿は、これまで語られてきた初期テレビ受容の枠に収まらない。都市部から離れたいわゆる僻地にある佐井村では、子どもたちが外の世界を知らず、高度経済成長を迎えた社会の波から彼らを取り残されることを村人たちは恐れていた。こういった状況がテレビに視聴覚教材という意味を与えたとするならば、今回の事例は地方における初期テレビ受容の一端を表すものだと考えられる。

都市部においてもテレビを教育的に受容しようとする動きはあった。東京都教育委員会では「テレビ教育研究指定校」を4校選定し、1953年から実験的にテレビ教育を行っている。しかしその手法は佐井村と異なり、テレビの悪影響を恐れ視聴番組を厳しく制限するというものだった。「テレビを見るとバカになる」という空気が早くも醸成され始めていた。低俗番組を批判した大宅壮一の「一億総白痴化」が流行語となったのは、佐井村でテレビの導入が始まった1957年である。

テレビ草創期、テレビ受容の可能性を追求した舞台は地方にあった。文部省とNHKはユネスコの要請を受けて、1956年に国内64の町村でテレビの集団視聴に関する実験調査を行っている。農村の生産活動や生活の改善を主な目的としたものだった。またNHK単体でも様々な取り組みがなされている。ただし、これらの事例は都市部の人々が地方を「啓蒙」するための装置としてテレビを使用しているものである。対して佐井村の事例では、地元の人々が自発的に受容しようとした姿があった。彼ら自身が実りあるテレビ視聴を希求し、彼ら自身の手によってそれがなされたということが重要である。同時期、新潟県においても類似した事例があった。松之山村（合併により現在は十日町市の一部）の浦田口小学校（現在は松之山小学校に改称）は1957年3月当時、新潟県内でテレビを持っていた唯一の学校である。教育的な動機に賛同した村民たちがお金を出し合った¹⁰。テレビ購入を決定づけた部落総代の老人の発言は、佐井村の臨時村会における村民の発言と重なるところがある。

本稿はテレビ草創期、テレビを豊かに受容する萌芽が地方にあったことを示すとともに、テレビの受容形式が雑多であった時代を解き明かすための第一歩である。

参考文献

- 青森県教育委員会編「さいはての地に咲くテレビ教育」『青森県教育広報』1959年1月号、pp.1-7。
秋月桂太「さい果てのテレビ村」『放送文化』1958年9月号、pp.27-29。
飯田崇雄「(モノ=商品)としてのテレビジョン」『放送メディア研究』第3号、2005年、pp.119-150。
飯田豊『テレビが見世物だったころ：初期テレビジョンの考古学』青弓社、2016年。
——「テレビジョン・フォークロア：テレビ受像機の民俗学、その今日的意義と学問的系譜」『福山大学人間文化学部紀要』第9号、2009年、pp.45-61。
エルキ・フータモ（太田純貴訳）『メディア考古学：過去、現在、未来の対話のために』NIT出版、2015年。
加藤秀俊「ある家族のコミュニケーション生活：マス・コミュニケーション過程における小集団の問題」『思想』第392号、1957年、pp.230-246。
北村充史『テレビは日本人を「バカ」にしたか?：大宅壮一と「一億総白痴化」の時代』平凡社、2007年。
佐井村編『佐井村誌上巻』佐井村、1971年。
佐藤卓己『テレビ的教養：一億総博知化への系譜』NIT出版、2008年。
東奥日報社「ふるさとあの瞬間 テレビがやって来た①～⑩」『東奥日報』2008年7月1日～7月30日、夕刊1面。
長谷正人「アウラとしてのテレビジョン：1950年代日本のテレビ受容をめぐる」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第60号、2014年、pp.21-35。
文部省社会教育局視聴覚教育課編『テレビと社会教育：農村におけるテレビ集団視聴実験調査報告書』日本放送教育協会、1958年。
吉見俊哉「テレビが家にやって来た：テレビの空間テレビの時間」『思想』第956号、2003年、pp.26-48。

⁹東奥日報社「ふるさとあの瞬間 テレビがやって来た⑧」『東奥日報』2008年7月12日、夕刊1面。

¹⁰秋月桂太「村のテレビ学校」『放送文化』1957年4月号、pp.30-33。